

4

地図教育の新たな可能性を求めて

— 日本人は国土をどのようにとらえてきたのか —

加藤 敦史 (立命館慶祥中学校・高等学校)

1. はじめに

地図とはある一定のルールに従い、制作者の意図によりわかりやすく地表空間を表現したものである。ルールとは地図記号、縮尺、図法などを指し、そして制作者の意図とは地図の目的を指す。例えばメルカトル図法で表現される世界地図は航海図として制作され、距離や方位、面積も大きな誤りがあることは地図教育で最初に教える事項である。小縮尺の地図のような場合にはその歪が明瞭なので、制作者の意図も教えやすい。しかし、大縮尺地図である国土地理院発行の地形図であっても地表面をそのまま表現しているのではなく、削除や誇張が行われている。それは地形図をわかりやすく表現するための作為である。例えば、市街地などでは街路や住宅が地図では削除されることが多々ある。これは地表をそのまま地図化すると煩雑となるからである。

これが住宅地ならあまり大きな問題とならないが、世界地図や日本地図となると話は別である。それは人々の世界観にも影響を与えることになるからである。地図は国家のイメージを自然に人々の心に形成させる道具であり、幾多の地図が国家や権力機関により利用されてきた。

2. 日本地図はどのように表示されているのか

(1) 毎日みる日本地図

私たちはテレビやインターネットの天気予報で日本地図を何度も見ている。これが私たちの日本地図となっている。天気予報（図1 気象庁 HP より）の場合、日本全体がテレビ画面で一度に見られるように編集されている。この地図では北海道は北の端に表示され、面積も実際のものより小さく表現してある。沖縄は日本海に移され、日本があたかも横長のテレビ画面にすっぽりに入るようになっている。沖縄が日本海にあると思っている人が存在する。これはテレビによってつくられた現代日本人の日本観といえる。



図1 天気予報図

(2) 国土地理院発行の日本地図

「1/300万 日本とその周辺」図（図2）

日本列島に沿って2本の標準線を設定した斜軸正角割円錐図法による。表示範囲：この縮尺では沖ノ鳥島と南鳥島は自然位置に示すことができず挿入図として表示される。歪み：北海道・本州・四国・九州・

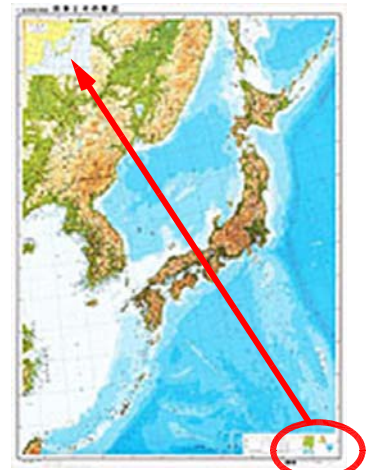


図2 1/300万日本とその周辺

南西諸島の投影の歪みをできるだけ小さくするよう設計された図であるが、小笠原や中国、ロシア等は歪みが大きくなっている。

「1/500万 日本とその周辺」図（図3） 2005年3月刊行

東京中心の正距方位図法 表示範囲：日本全域が自然位置で表示
歪み：東京以外の2地点間の距離は歪みが大きくなる。一葉の地図で日本全図が自然位置で初めて表示された地図である。

（3）日本近海の表示

日本近海の表示を調べることで、日本と近隣諸国との関係が見えてくる。学校地図帳を含めて多くの日本図は日本列島と日本海、東シナ海との関係を捉えている。それは古代から現在までにいたる日本と隣国（中国、朝鮮半島）の関係の深さからくるものであり、われわれは隣国といえば朝鮮・韓国、中国となる。しかし、オホーツク海全域を表示する地図はほとんど見当たらない。学校地図帳で日本列島とオホーツク海全域を表示するのはユーラシアやロシアの図版となる。織田武雄（1974）は18世紀、クックによりオーストラリアやニュージーランドをはじめ、太平洋の多くの諸島が発見されたのに対して、世界図において19世紀までになお正確な形態が不明のままに残されていたのは、両極地方を除けば、北海道（蝦夷地）から以北のところであったと言及している。現在、北海道からオホーツク海沿岸は不明確な、漠然とした地理的認識しか持たないところとなっている。それは現在の日本人がオホーツク海に関心がないのではなく、日本の周辺地域に関心を持っていないことである。われわれは何の疑問も持たず地図を正しいものと考え、そして、製作者の意図によってつくられた地図の中で物事を考えている。地図は時代の世界観を反映するとともに、また地図によってわれわれの世界観は形成されていく。

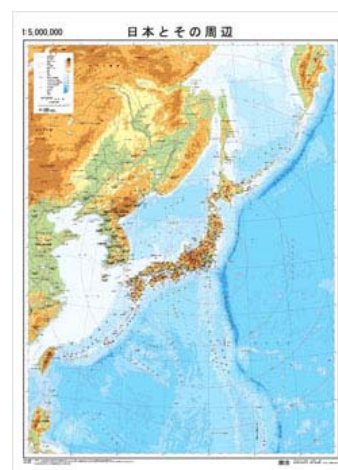


図3 1/500万日本とその周辺

3. 地図教育で周辺地域を教える

（1）中心と周辺

空間における中心と周辺の関係は個人であれば中心はその個人が存在する場所であり、周辺は距離（ここでは精神的距離も含む）の関係で決定する。そして国家や地域であれば中枢管理（高次）機能を持った政治、経済、交通などの機能が集中する都市であり、日本では東京となる。しかし、この地表空間は球面であるので物理的に言えば中心などは存在しない。地図は球面の断片である地表空間を表現しながらも、中心という概念を入れることでわれわれに混乱をもたらす。北海道は北の端であるといったように。また、空間認知研究で多くの先行研究にあるように、中心は距離や方位をも混乱させる。現実には私たちは同じ縮尺で世界をみることをしない。認知度の高い場所と認知度の低い場所では、頭の中の距離が大きく違う。日本では東京ばかりの情報が発信される現状では、日本人の頭の中の距離は大きく狂ってしまう。日本全体を同縮尺で見ることが必要である。地図教育における目標で最も重要なことは空間認識の把握であるが、この空間認識とは正しく距離、方位、形を理解することである。地図教育において距離、方位などを用語としてではなく、その本来の意味、課題まで踏み込んだ指導が必要である。

(2) 北海道を中心とした日本全図 (図4)

日本の主要都市の位置、方位の関係について2009年に調査を行なった。そこから次の2点のことが明らかになった。①解答者がどこに住んでいるか(出身者)による違い。②日頃どんな日本地図を見ているかによる違い。理由としては①は頭の中の地図がその属性によってある共通性をもつ。②は良く見慣れている地図によって私たちの見方は固定されてしまう。このことから今までの概念を破る日本地図として「北海道を中心とした日本全図」(2010)(図4)を制作した。この地図は札幌を中心とした正距方位図法で、方位を110度東に回転させ、1葉の日本地図としては日本全域とオホーツク海全域を初めて表示したものである。この地図からは既存の日本地図とは違った日本と朝鮮半島、アジア大陸、オホーツク海との関係が見えてくる。見方を変えることで世界は変わる。この地図は大きな反響を呼んでいる。地理関係者はもちろん辺境地(ボーダー)研究、歴史研究、北方研究、生態系研究者などの学術研究のほかに北海道の市民からも高い評価を得ている。さらに特筆すべきは民間企業の社員教育、企業戦略等での利用も相次いでいる。このことは地図教育のもつ可能性が非常に大きいことを意味している。



図4 北海道を中心とした日本全図

(3) 沖縄を中心とした日本全図 (図5)

北海道を中心とした日本全図に引き続き、今回の研究のために「沖縄を中心とした日本全図」(2011年)を制作した。この地図は那覇を中心とした正距図法で、方位を63度西に回転させた日本全図である。これも沖縄と中国、台湾、フィリピン、ベトナムなどの新たな関係が見えてくる。沖縄の地政学的重要性がよくわかる。この地図を沖縄にある全ての高校、行政機関(県、市など)、大学、報道機関、さらには県外の関係者に送付した。返送された意見の一部を紹介する。



図5 沖縄を中心とした日本全図

<西に63度回転させたことで沖縄県と中国、東南アジアとの位置関係が明瞭となり、「地理」だけではなく「歴史」とくに琉球王国の歴史の授業には大変活用しやすい。><那覇空港の貨物輸送のハブ化を目指す沖縄県の地理的特性を説明する際にも充分活用できる。><従来の日本全図では朝鮮半島や中国、ロシアの一部しか把握できず(しかも沖縄県は別枠表示が多い)、「グローバル化に対応する国際的な資質の持ち主」の育成に不十分である。>

4. 戦後の学校地図帳における日本の表示

占領下から現在に至る検定学校地図帳における日本の表示がどのようになっているかを調べた。地図に関する教育が行なわれるのは地理の授業であり、とくに日本についての学習は系統地理や外国を学習対象に置いた高校地理よりも小中学校となる。また高校では地理を選択する生徒は約3割という状況を考えると、中学低学年で必修科目として全員が目にする中学地図帳は重要となる。戦後初である昭和25年（占領下）発行の中学校社会科地図帳から28年、30年、31年、43年、48年、平成17年を資料として入手した。資料が多いので、その詳細な内容は別の機会に報告をしたいが、日本と周辺地域の表示形式は現在と全く変わらない。昭和6年発行の三省堂旧制中学用の地図帳においても南樺太、千島、朝鮮半島、台湾と植民地の頁があるものの、地図帳のスタイルは全く変わらない。明治以降の日本と近隣国の関係がこのような表示形式に表れていると考えられる。さらに、日本全領域、とくに周辺地域である沖縄、北方領土、竹島、尖閣諸島や国境線の表示に関して多くの問題が残る。例えば竹島は昭和31年に初めて表示されるが、「ユーラシア」図では表示がない。昭和43年の「日本の位置と行政区分」図では竹島、尖閣、沖ノ鳥島などの表示がない。このような表示の混乱は多数に及ぶ。学校地図帳は検定教科書であるにもかかわらず、記述が統一されていない。同じ出版社でも、さらに1冊の地図帳の中でもページ（図版）により異なる。おそらくこれは図版や縮尺の問題だけではない。また高校の地図帳のなかには最近まで日本の領域を示す頁がないものもあった。このことは日本の領域を明確に表記しようとする意思がないと考えられる。これでは日本人のアイデンティティを育成するには困難となろう。

最後に地図は場所を調べるだけの教材ではない。日本における地理・地図教育の位置づけが諸外国に比べ常々低いと痛感しているが、地理・地図教育には非常に重要で大きな可能性があることを強く訴えたい。

参考文献

- 今尾恵介 2007「世界の地図を旅しよう」白水社
 織田武雄 1974「地図の歴史」講談社
 加藤敦史 2008「東京＝新宿の距離は札幌ではどこか」雑誌「札幌人」19号
 加藤敦史 2010「北海道の日本地図を作ろう」雑誌「札幌人」24号
 財団法人 日本地図センター 2003「新版 地図と測量 Q&A」
 ジェレミー・ブラック 2001「地図の政治学」青土社
 堀 淳一 1992「地図」現代書館

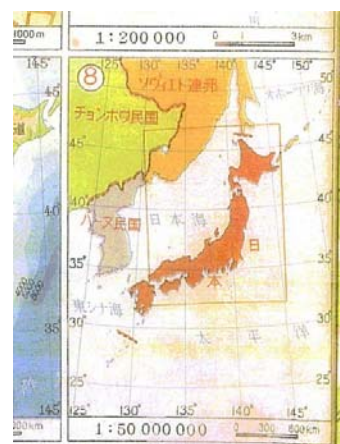


図6 昭和25年中学校地図帳
（帝国書院）
日本全域を表示する唯一のもの、
国境線が奄美諸島の北にある。

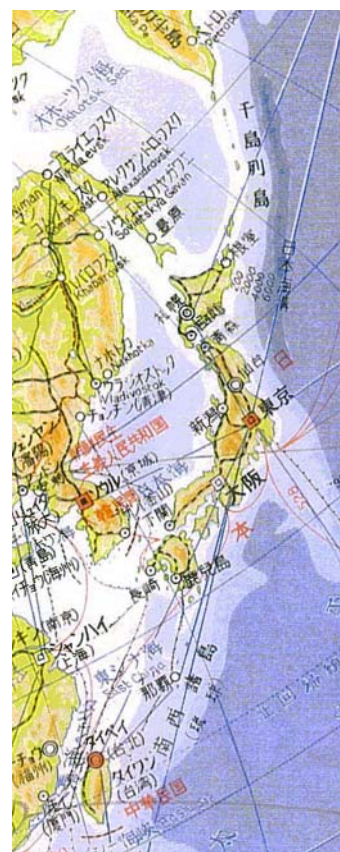


図7 昭和31年中学校地図帳
（帝国書院）
対馬海峡以外は、国境線が表示
されていない。